

Traditional Tales Stage 6 'Frog Prince'

p.2

むかしむかしあるところに、ひとりのおひめさまが住んでいました。

おひめさまのお誕生日に女王様が言いました。

「今日はあなたの好きなおもちゃをなんでも買ってあげます。約束するわ」

p.3

「それならわたし、金でできたボールがほしいの」とおひめさまが言うと、女王様は、

「まあ、そんなボールはありませんよ」と言いました。するとおひめさまは、

「でも約束は約束でしょう」と言いました。

p.4

女王様は、しかたなく特別に金のボールを作らせました。

p.5

ある日、おひめさまがそのボールで遊んでいると、うっかり池に落としてしまいました。

「金のボールがなくなっちゃった！」

おひめさまはそう言って泣き出しました。

p.6

そこへ小さなカエルがピョンピョンとんできて、「ぼくがとってきてあげようか」と言いました。

「カエルがしゃべったわ！」おひめさまが驚いてそう言うと、

カエルは

「ぼくは特別なんだ！」と言いました。

p.7

そしてカエルは言いました。

「とってきてあげてもいいけど——ひとつだけ約束してほしいんだ」

「どんな約束だってするわ。このかんむりをあげましょうか」

「カエルにかんむりなんて必要ないさ」

p.8

「じゃあ、何がほしいの？」

「ぼくとともだちになってほしいんだ」

「そんなの簡単よ！約束するわ」

p.9

おひめさまがそう言うと、カエルはピョンと池に飛びこんで、約束どおりボールをとってきました。「さあ、これでぼくたち、ともだちだね」とカエルが言いました。

p.10

ところがおひめさまは、お礼も言わずにカエルからボールをひったくりました。

カエルは「おい！約束はどうしたんだよ！」と言いましたが、おひめさまは何も言わずに行ってしまいました。

p.11

その夜、おひめさまが夕食を食べていると、外からトントンという音が聞こえてきました。

「何の音かしら？」と女王様が言うと、

「何でもないわよ」とおひめさまが言いました。

p.12

「扉を開けなさい！」女王様はそう言いましたが、おひめさまは、

「お願い！やめて！」と言いました。

p.13

でもついに女王様は扉を開けてしまいました。

「ああ、もうダメだわ！」とおひめさまが言いました。

扉の向こうにはカエルが1匹いました。カエルは部屋の中に入ってくると、

「こんばんは」と言いました。

p.14

「まあ、カエルさんどうしたの？」女王様がたずねると、カエルは、

「おひめさまが、ぼくとともだちになってくれると約束したのです」と答えました。

p.15

「カエルとともだちになるのなんていやよ！だってヌルヌルして気持ち悪いもの！」

おひめさまがそう言うと、女王様が、
「それでも約束は約束です」と言いました。

p.16

こうして、カエルも席につき、金のお皿にのったごちそうを一緒に食べました。

p.17

「さあ、もう池に戻ってくれるでしょう？」おひめさまがそう言うと、カエルは、
「ほんとうのともだちなら、まだいてもいいはずだろ」と言いました。

「約束は約束だよ」

p.18

しかたなく、おひめさまはカエルを自分の部屋に連れて行きました。

そしておひめさまが「このきれいな箱の中で寝るといいわ」と言うと、

カエルは「ほんとうのともだちなら、ちゃんと枕にねかせてくれるだろ」と言いました。

おひめさまはあきらめてカエルを自分の枕の上のせてやりました。

p.19

そのとたん、不思議なことが起こりました。

カエルがどんどん大きくなって、ついに……ひとりの男の子になったのです！

「あなたはいったい誰？」おひめさまが聞きました。

p.20

「ぼくは王子さ」とその男の子は言いました。「悪い魔法使いのせいで、カエルになっちゃったんだよ。元通りになるには、ほんとうのともだちを見つけるしかなかったんだ」
「でも、わたしはちっともいいともだちじゃなかったわ。だって、あなたのこと最初は好きになれなかったんだもの」
「そんなことはないさ。きみと一緒に食事もさせてくれたし、おまけに自分の枕にぼくをねかせてくれただろう」

p.22

こうして、おひめさまと王子様はほんとうのともだちになりました。2 人とも金のボールで遊ぶのが大好きでしたが、決して池には近づかないようにしました。

p.23

やがて大人になると、おひめさまと王子様は結婚することになりました。

結婚式で、ふたりはいつまでもお互いに愛しあうことを約束しました。

そしてそのとおり、その気持ちはいつまでも変わることはありませんでした。

約束は約束ですからね。

Traditional Tales Stage 6 'How the Bear Lost His Tail'

p. 2

「みんな、クマってどんな動物か知ってるよね」

体が大きくて、毛むくじゃら、いつもこわい顔をしていて、しっぽが短い動物と言え——そう、クマですよ。ところが、むかしからずっとそうだったかという、実はそうではなかったんです。

p. 4

毛むくじゃらの大きな体はそのままだけど、そのむかし、クマはもっとやさしくて、いつもニコニコしていて、おまけに、ふさふさした長いしっぽを持っていたんです。このしっぽ、むかしのクマはみんなとても大事にしていたんですよ。

p. 5

じゃあ、どうしてあんなに短くなったのかって？ どうしていつもこわい顔をしてるのかって？ それはね、ぜんぶキツネのせいなんです。

「その話、ぼくがしてあげるよ」

p. 6

ある寒い日のこと、キツネが食べものをさがして走りまわっていると、湖のほとりで釣りをしている人を見かけました。その人はカチコチに凍った湖に穴をあけて、そこから釣り糸をたらししていました。

p. 7

魚はもうずいぶんたくさんつれていました。つった魚はひもに通して、雪の上に置いてありました。キツネのおなかがぐーっと鳴りました。

p. 8

ずるがしこいキツネは、足音をたてないようにそろそろと魚に近づいたかと思うと、あっという間に魚をくわえて逃げてきました。

p. 9

森の中で、キツネはクマに出会いました。クマもお腹がすいていました。

クマはふさふさした自慢のしっぽをふりまわしながら言いました。

「よう、キツネくん！ ずいぶんたくさん魚を持っているね」

p. 10

そのときキツネは気がつきました。クマのしっぽが、自分のよりもずっと長くて、ずっとふさふさしていることを。

キツネはちょっと悔しくなりました。それに魚をクマに分けてやるのもいやでした。

p. 11

そこでキツネは言いました。

「これ、全部自分でつかまえたんだよ！」

「へえ、いったいどうやって？」

「かんたんさ。湖の氷に穴をあけて、しっぽを水につけておくれさ」

p. 12

「そいつは冷たそうだなあ！」

「そりゃそうさ。だけどすぐたくさんとれるよ！ じっと座ってるだけで、魚の方から来てしっぽに食いついてくれるんだからね！」 キツネは言いました。

「ちょっと痛いかもしれないけどさ。でもしっぽをぬいちゃだめだよ！ 魚が全部逃げちゃうからね。きみのしっぽはずいぶん長いから、ぼくよりずっとたくさんつれるだろうなあ！」

p. 14

「そうか！ キツネくん、どうもありがと！」

「いいかい、ぜったいすぐにしっぽをぬいちゃダメだよ！」 キツネはそう言いながら……

……盗んだ魚をもって、さっさと逃げて行きました。

p. 15

くまはさっそく氷の湖に向かいました。そして、キツネに言われたとおりに、氷に穴をあけると、ふさふさした長いしっぽを穴の中に入れました。

p. 16

その水の冷たいこと！あんまり冷たくて、しっぽがチクチクと痛みました。魚がやってきてしっぽに食いつくと、ますます痛くなりました。でもクマはキツネに言われた通り、じっとがまんしました。

「いたいっ！」

p. 17

湖は冷えきっていました。クマが開けた穴もまた凍りついてしまいそうでした。でもクマは気がつきません。

p. 18

クマは歯を食いしばってがんばりました。しっぽが痛いぶんだけ、魚がたくさんとれると思いこんでいたからです。

p. 19

でもそれからしばらくして、もうがまんができなくなりました。
「もう魚なんてどうだっていい。痛くて痛くてどうしようもない！」
クマはしっぽを引っぱりだしました。

p. 20

ところがそのころしっぽはカチンコチンに凍っていたのです！ああ、かわいそうに、引っぱりだした拍子に、クマのしっぽはまるでつららのようにポキンと折れてしまいました。おしりに残ったのはちょこんとしたしっぽの根っこだけでした。もちろん魚は1匹もつれませんでした。

「キツネにだまされたんだよ」

p. 21

それ以来、クマのしっぽはみんな短くなりました。それにいつもこわい顔をしているのは、みんなにバカに

されていると思っているからなんです。

p. 22

それで、キツネはどうなったかって？キツネは昔も今も、すばしっこくてずるがしこいまんまです。

p. 23

クマはといえば、それからはもう誰の言うことも信じなくなってしまいました。

Traditional Tales Stage 6 'Monkey's Magic Pipe'

p. 2

むかしむかし、ある森に、かいじゅうが1匹住んでいました。

かいじゅうの住み家は、骨だらけのほら穴でした。

体はとてつもなく大きく、毛むくじゃらで、いつもお腹をすかせていました。

p. 3

ある朝、かいじゅうは森にでかけていきました。背中には、えものを入れる袋をしょっています。

そして不気味な声で歌を歌い始めました。

さあ見てろ。これからおまえを食ってやる。

おれはかいじゅう。気をつけろ！

p. 4

へビはするりと逃げて行きました。

オウムはバサッと飛びたちました。

ヒヨウもスーッといなくなりました。

かいじゅうは水飲み場に向かったのです。

p. 5

かいじゅうは腰をおろしてえものを待ちました。

えものがやってきたら、その毛むくじゃらの腕でしっかりとつかみ、黄色い大きな歯でバリバリとかみくだくつもりです。

「待つことにはかけちゃ、オレ様が1番だ」

かいじゅうはそう言いました。

p. 6

かいじゅうは草むらに腰をおろして、またあの不気味な声で歌いました。

さあ見てろ。これからおまえを食ってやる。

おれはかいじゅう。気をつけろ！

p. 7

いちばん最初に水飲み場にやってきたのはへビでした。

へビが水の中に滑りこもうとした瞬間、かいじゅうがパッと飛びかかりました。

「つかまえたぞ！」かいじゅうがどなりました。

「ここに入れ」

へビは袋に閉じ込められてしまいました。

p. 8

次に来たのはオウムでした。

水を飲もうとおりに来たところを、ガシッとつかまれてしまいました。

「つかまえたぞ！」かいじゅうがどなりました。

「ここに入れ」

オウムは袋に閉じ込められてしまいました。

p. 9

今度はヒヨウが姿をあらわしました。

ケンカならヒヨウだって強いけれど、かいじゅうにはかないませんでした。

「つかまえたぞ！」かいじゅうがどなりました。

「ここに入れ」

ヒヨウも袋に閉じ込められてしまいました。

p. 10

「こいつら全部、1匹残らず食ってやる」かいじゅうはうなりごえを上げながら、ほら穴に向かいました。背中にしょった袋が、ポコンポコンと音をたてています。

「狩りにかけちゃ、オレ様が1番だ」

かいじゅうは言いました。

p. 11

ふと見ると、サルが木の下に座っています。

「うまそうだな」かいじゅうが言いました。「デザートにぴったりだ！」

サルはその小さな手で笛をにぎりしめながら、えものが入った袋を見つめていました。

p. 12

その袋に自分の仲間が入っていることを、サルは知っていました。

でも頭の良いサルは、みんなを逃がしてやるうまい方法をちゃんと考えていました。

「ねえ、かいじゅうさん」サルは声をかけました。
「この森で1番おどりが上手なのはあなたでしょう。だから、かいじゅうさんのためだけに新しく曲を作ったんです」

p. 13

「そりゃあ、オレ様が1番踊りがうまいに決まっている。なにしろ、オレ様はなんでも1番だからな」かいじゅうはそう言いながら、つま先をツンと立てました。

「よし、吹いてみろ」

p. 14

サルが笛を吹くと、かいじゅうが踊り出しました。すると、サルが突然吹くのをやめてしまいました。

「ダメですね」サルが悲しそうに言いました。

「あなたはとても上手だけど……」

p. 15

「なんだと？」サルがどなりました。

「一緒に踊る相手がいないなんてかわいそうに……」とサルは言いました。

「それならここにいるわい」かいじゅうはそう言うと、袋の中からヘビを取り出しました。

p. 16

かいじゅうはヘビを首に巻きつけて、くるくるくるくる踊りまくりました。

「とてもすてき！」サルがほめました。「そろそろ別の人と踊ったらどうですか」

かいじゅうは袋を開けて、今度はオウムを取り出しました。

その間に、ヘビはするりと逃げて行きました。

p. 17

オウムは羽をバタバタさせたり、キーキー泣きわめくばかりで、あまり踊りはうまくありません。しかたなくかいじゅうはオウムのまわりをぐるぐるまわりながら踊りました。

「やっぱり踊りもオレ様が1番だ」かいじゅうは言いました。

p. 18

「さあ、次はだれと踊りますか」サルが声をかけます。

かいじゅうは袋を開けて、ヒヨウのしっぽをつかんで引っ張りだしました。

その間にオウムは飛んでいきました。

p. 19

ヒヨウはバタバタとあばれまわったり、かみつこうとしたりしました。そのせいで、かいじゅうの踊りがだんだん激しくなってきました。毛むくじやらの足をドンドンとふみならし、ツメをカチカチ言わせています。

「さあ、次はだれですか」サルが叫びました。

p. 20

そのすきにヒヨウはサッと草むらに逃げこみました。

かいじゅうは袋をのぞき込みました。そして、

「からっぽじゃないかあ！」とどなりました。その声の大きさに、森じゅうの木の葉がふるえました。

p. 21

その間にサルは逃げ出しました。かいじゅうは捕まえようとしたのですが、息が切れてうまく走りませんでした。かいじゅうは踊りすぎて、疲れ切っていたのです。もうあの歌をちゃんと歌うこともできません

さあ見てろ。これからおまえを食ってやる。

おれはかいじゅう。気をつけろ！

p. 22

「また今度ね」サルが言いました。

「今日の1番は私よ！」

サルは笛を吹きながら、ピョンピョン跳んでいきました。

笛の音を聞いた動物たちは、みんなで踊りをおどりました。

p. 23

その後、かいじゅうはどうなったでしょう？

かいじゅうはあんまりくたびれたので、ほら穴に帰ってグーグー眠りました。

そのいびきのせいで、ほら穴の骨がガラガラいうほどぐっすりと……。

みなさんがもしもこのほら穴を見つけたとしても……

絶対に入っちゃダメですよ！

Traditional Tales Stage 6 'Yoshi the Stonecutter'

p. 2

むかしむかし、日本のある山里にヨシという名前の石屋が住んでいました。

ヨシの家は貧乏で、おまけに毎日かたい石を削ったせいで、腰はまがり、手のひらはカチカチになっていました。

p. 3

そんなヨシが毎日働いている山には、昔から山の神が住んでいると言われていました。山の神は人々の願いをかなえてくれるといううわさでしたが、ヨシは1度も会ったことがありませんでした。

p. 4

ある日のこと、ヨシはある立派なお屋敷に石を届けました。一目見て、ヨシはそのお屋敷の美しさに心を奪われました。おまけにご主人はみごとな絹の着物を着て、真っ白でやわらかそうな手をしています。

p. 5

「ああ、私もあんなお金持ちになりたい」ヨシがそうつぶやいた時です。どこからともなく冷たい風が吹いてきたかと思うと、山の神が姿をあらわしました。そしてヨシの耳元でこうささやいたのです。

「おまえの願いをかなえてあげましょう——ヨシ、おまえはお金持ちになるのです」

p. 6

家に帰ってみると、ヨシが住んでいた小屋がりっぱなお屋敷に変わっていました。ヨシはほんとうにお金持ちになったのです。そこでヨシはすっかり仕事の道具をしまいこんで、あとはゆっくりと窓の外をながめて過ごしました。

p. 7

暑い季節がやってきました。ある日、ヨシの家の前を殿さまの行列が通りかかりました。

殿さまのまわりでは、何人ものお付きのものがうちわで風を送ったり、黄金の日傘で日かげを作ったりしていました。

「ああ、私も殿さまになりたい」

p. 8

ヨシがそう言うと、また山の神があらわれてこう言いました。

「おまえの願いをかなえてあげましょう——ヨシ、おまえはお殿さまになるのです」

すると今度はほんものの殿さまになりました。気がつけばヨシはかごに乗って、何人ものお付きのものに囲まれていました。

p. 9

殿さまになったヨシは、黄金の日傘の下でにっこりとほほ笑みました。お付きのものが、宝石をちりばめた器に冷たい水を入れて持ってきました。ヨシは満足そうにその水を飲みました。

p. 10

そうこうしているうちに、だんだんと日ざしが強くなってきました。もう日傘もあまり役に立ちません。水浴びをしても、あっという間に乾いてしまいます。

「そうか、殿さまよりも太陽の方が力が強いのだ。ならば私は太陽になりたい」

山の神がそれを聞きつけてこう言いました。

「おまえの願いをかなえてあげましょう——ヨシ、おまえは太陽になるのです」

p. 13

ヨシは自分の体が空高く舞い上がって行くのがわかりました。そしてギラギラと輝き始めました。今度は太陽になったのです！ヨシは大地に向かって、日光をさんさんとふりそそぎました。輝きはどんどん増していきました。ヨシが放った日光のせいで、人々は汗をかき、肌は黒くなりました。畑はカラカラに乾き、草も枯れてしまいました。そのどれもがヨシの力の強さを物語っていました。

p. 14

そんなある日のことです。太陽になったヨシがいつものように下に目をやると、地面がよく見えません。雲がじゃまをしているのです。ヨシは力いっぱい輝いてみせましたが、雲は動きません。

p. 15

「そうか、雲は太陽の光をもおおい隠してしまうのか。ならば私は雲になりたい」
すると山の神が言いました。
「おまえの願いをかなえてあげましょう——ヨシ、おまえは雲になるのです」

p. 17

ヨシは大きな灰色の雲になりました。雲は日ざしをさえぎって、日かげを作りました。そのおかげで村は涼しくなりました。次にヨシは雨を降らせました。
すると、村中の川に水が流れはじめ、地面にはいくつもの水たまりができました。草はあおあおと生いしげり、畑の野菜もぐんぐん育っていきました。

p. 18

ヨシはどんどん雨を降らせました。ところが今度は雨が多すぎて、小さな川が滝のように流れ出したり、川の水があふれ出したりしました。畑の野

菜もくさってしまいました。

p. 19

雨は洪水になって、村をおそいました。道という道に水が流れ、村中水びたしです。でもそんな中、びくともしないものがありました。それは山の岩でした。

p. 20

「なんだ、雲よりも岩の方が強いのか」
ヨシは文句を言いました。「ならば、私は岩になりたい」
するとまた山の神があらわれて言いました。
「おまえの願いをかなえてあげましょう——ヨシ、おまえは岩になるのです」

p. 21

これでヨシは岩になりました。ちょっとやさっとじゃびくともしない、大きな岩です。もう太陽も雲もおそれる必要はありません。
「世の中で1番強いのは私だ」ヨシは大いばりで言いました。

p. 22

ところがそのとき、ヨシはだれかが自分の体をコツコツとけずっているのを感じました。
「なんということだ！石屋の方が岩よりも強いではないか！ああ、私は人間に戻りたい！」
それを聞いた山の神がほほ笑みました。
「おまえの願いをかなえてあげましょう——ヨシ、おまえは人間になるのです」

p. 23

ヨシは早速仕事の道具を取りだして、働き始めました。腰はまがり、また貧乏な暮らしに戻ってしまいましたが、それでもヨシはとても幸せでした。